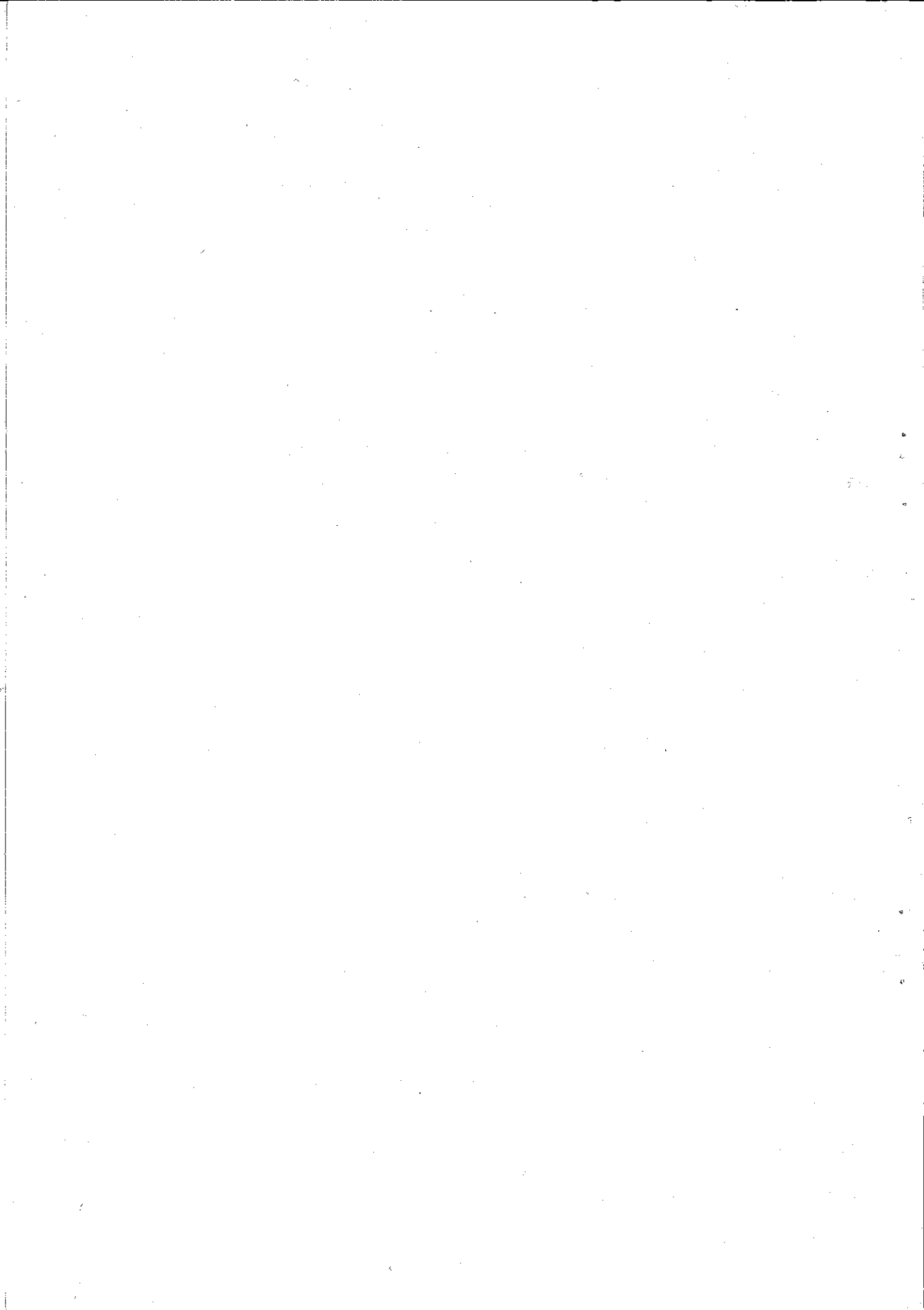
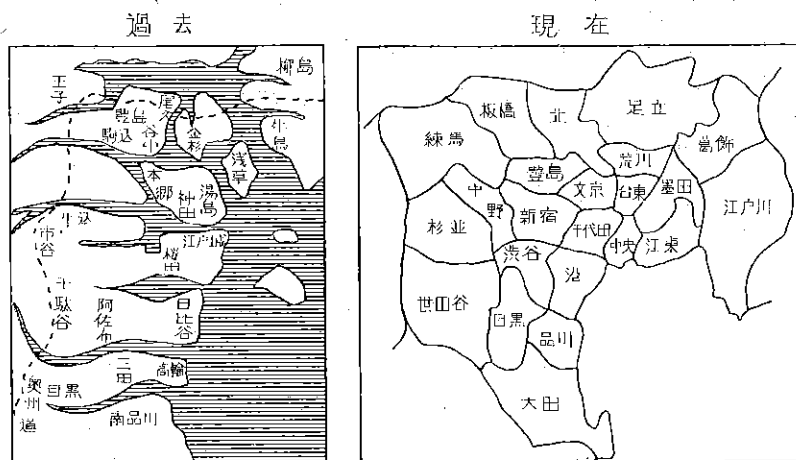


1. 区 の 沿 革



江戸および荏原の名称の概要



武蔵国すなわち武州江戸は、秩父権守重綱以来統轄する所となり、その後裔江戸太郎は治承4年10月に源頼朝に属してすべての政道を司どった。以後江戸家は代々相続していたが、後花園天皇康正2年太田道灌特資が江戸氏に替って江戸に入り、江戸城のもとなるものを築き上げた。

道灌の治政30年の間に一聚落より江戸は漸次市邑に発展したが、文明18年に道灌没後扇谷上杉氏が住んだが、小田原北条氏に敗れて江戸は大永4年(1524年)小田原北条氏の領地となってから67年間、その管下にあったので昔の面影は失なわれ衰運した。

天正18年8月(1590年)徳川家康が江戸城に入って(道灌江戸城築城から135年後)から、日に新たに江戸は繁昌しはじめた、徳川幕府は15代続き265年の長い間江戸は栄えた。

明治元年遷都に先だち江戸の名称は東京と改称し遂に今日の首都となった。

江戸の地名の起源については「武蔵風土記」に荏戸と言ったと記録されており、荏草の多く産した所で荏所となりそれが更に転訛して荏戸と称するようになったとある。また江戸太郎重長が居住したので江戸の号が残ったとも言われている。また江戸の江は入江の意味で戸は津に通じすなわち湊の意味で、入江の湊が江戸と変化したのであろう。

常陸の国にも江戸の地名があり、そこは入江の湊の形状をそなえている。江戸は江所の義で戸の字は地名が最も多く水戸、松戸、榎戸、杉戸、登戸、阿戸など皆所の意味が多い。「要覧稿江戸地名の条より」。

また江戸の号は江に望める意味であらう。「南向亭茶説より」、入江であった所から江所と言われ、さらに転訛して江戸と呼ばれたようである。

「新編武蔵風土記稿」に荏原郡、すべて郡中の地勢をおすに東の方海浜に近きによりて3分の1平

地にして、西北の方へ続きては村々凡て高低の岡、野土黒土なれば穀物に宜しからず、是を細にいえば、大井村より南の方新井宿、一之倉堤、池上の村、皆岡つづきなり、又池上村より南西の方も小山勝なり、ここより海浜の方へは一円平地にして数十村あり、その内大井村は最海岸にそひ広平の地なり。又目黒川の左右に水田ありてその幅4・5丁許りにて、品川海浜まで行程1里余りもうちづけり、この目黒川より豊島郡によりたる岡には諸家の下家敷或は商実など、あまたありて江戸御内府につづけり。荏原郡と云う地名の起源については、36代光徳天皇の大化の改新（646年）に武蔵国に豊島、荏原両郡を置くとあり武蔵国中最古の地名である「和名抄」に荏原郷の名があった、その後名に及んで郷名の荏原をとって郡名にしたとある。又、武蔵野の中でも此辺は荏草を多く植した所なので斯くは名称したとあり。

「武蔵風土記」には江原などと書いてあるし、書物によると縁原、永原江波良など種々に記してある。

「延喜式二十八兵部式」に武蔵国駅馬店屋小高、大井豊島各十匹、伝馬都築、橘樹、荏原、豊島郡各五匹と見え、「足利管領後帳（応仁武鑑）」には武蔵領主梶原美作守経景の家老荏原五郎兵衛云々とあり、「江戸名所図絵」に文永年中で鎌倉時代荏原は武蔵野平野の一区画で往昔の荏原郡は最初八ヶ郷に分たれ、次いで一保四郷となり、近古時代に郷名が領名に変わって五領に分轄された。

上古時代＝蒲田郷（加万田）、田本郷（田毛止）、満田郷（マンタ）、荏原郷（江波良）、覚志郷（加々之）、御田郷、本田郷（本多）、桜田郷（佐久良田）。

中古時代＝六郷保、世田ヶ谷郷、千束郷、品川郷、大井郷。

近古時代＝六郷領（34ヶ村）、世田ヶ谷領（30ヶ村）、馬込領（13ヶ村）、麻布領（5ヶ村）、品川領（13ヶ村）95ヶ村であった。

品川領＝大井村、上蛇窪村、下蛇窪村、戸越村、桐ヶ谷村、居木橋村、下大崎村、上大崎村、不入斗村（小山村となったとおもわれる）、中延村、北品川宿、南品川宿、二日五丁目市村 以上13ヶ村。

後年品川県が廃され、荏原郡を十九に分轄した、明治初年頃より大正12年の時は六町十三ヶ村となった。

六町＝品川町、大井町、大森町、大崎町、羽田町、入新井町。

十三ヶ村＝世田ヶ谷村、六郷村、蒲田村、池上村、矢口村、調布村、馬込村、駒沢村、玉川村、碑倉村、平塚村、松沢村、目黒村。

品川の沿革

70代後冷泉天皇康平5年（1062年）源八幡太郎義家が奥羽の貞任討伐の途中、西品川三ツ木で馬から下りて品川浦に身を清めて戦勝を貴布弥神社に祈った（荏原神社誌）。品川が台地だけであった時代は、大井郷の中に含まれていたことが古文書に大井村字観現台と書いてある。

往時の品川は目黒川が何万年かの土砂を海へ海へと運んで、御殿山の目の下品川浦へデルタを造り紐島、縄島、兜島、州の島、天王洲、州の明神の旧名を残して、立派な三宿ができあがった。

平安時代の創基と言われる品川寺、常行寺や、北条時頼（鎌倉時代）の開基といわれる海晏寺も、もとは皆台地にあったが後に低地に移った。大永4年（1524年）小田原北条氏の分国となり、さらに荏原五領中にも品川領の名を留め、その一つとして栄えた。徳川家康江戸へ入城し、慶長6年（1601年）に東海道五十三次の駅が定まり、その親宿となり江戸四宿中における首位であった。天保2年「寺門静軒江戸繁昌記」に品川は江戸の咽喉也、天下第一の巨港たり、東海道五十三駅之初程たり、繁会知る可し矣。御殿山の桜春にして而して遊人湧くが如く、海晏寺の楓、秋にして而して遊客織るが如し、東海寺の幽邃閑吟神逝く宿檣森を江を争うて錨を下し、妓館稠密岸を奪うて楼を起す、風蘭露簾又納涼に宜しく又月を賞するに宜しと記され、「江戸名所図絵」に江府の喉口にして東海道五十三駅の首なり、日本橋より二里南北と分つ東海寺の南に傍て貴船の社の側を流るる川を堺とす、或る人云く是則、品川と称する所の水流なり云々。

旅舎数百戸軒端を連ね常に賑はしく、往來の旅客絡駅として絶ず、按るに品川の地名の発る所近きにあらず、小田原北条家所領役帳に、葛西様御領という中に品川南北とありその頃も二つに分れてありしと覚えたり。

南向亭云く、品川旧下無川という、此川海に近く下流直に海に入る故にしか名づくと云々。かく云えるは今南北の宿の中間、中の橋の下を流れて海に入所の河流をいう是則品河なり、又事跡合考に往古品川高縄にいたりては、乗掛馬二疋並びて通る事あたはざる程の狭き浜路なりしを、天正18年の後台命ありて八山の下より本芝のあたり迄、道幅三十五丈に切開かしめ給うたり云々。「日本地理風俗大系」に帝都の角に続く一大市街地で、市外地域は郊外として市内と離して取扱われているが、これはただ行政上からかくするのみで、今日の品川町は実質において市内の或地域よりも優れている点もあり、また東京という大都市を研究する上に、これを市内と離して独立に取扱うことは、不合理であり、かつ實際上不可能である、とも角市内とはあらゆる点から見て不分離の関係にあるもので、同様なことは以下に述べる大崎町、大井町、大森町、入新井町、蒲田町、その他にもいえるが、見方によっては品川町は大崎町これ等より市内に更に近いだけ、その関係は一層密接であるともいい得られる。品川町は誰も知る如くもと東海道五十三次の第一駅で、その繁華であったことは図絵や古老の昔語りなどからも想像される。しかし当時賑かであったところは街道に沿う細長い海岸地帯、いわゆる街村の形態を作っているところだけで、これから一步西にずれば水田も広く開け農家が点々と散在していたのである。今その地形を見るに町の中央を東西に目黒川が貫流して幅約一キロの細長い沖積地を作り、その北と南の両側は二十米内外の台地をなしている。この台地には更に小さな入込みが谷頭浸蝕によってできているから、台地と低地との境界線は随分複雑になっている。この目黒川は古名を品川といったことからこれが地名になったと伝へ、或はまた砂川といったのが転じたともいっている。しかるに今日実際に行ってみてもまた最近の地図を見ても、沖積地といわず、台地といわず、到るとこ

る人家が建並び、また目黒川の谷は工場で埋まり地形の細い変化を遠望することは困難である。なお地図では等高線が人家によってかき消され、殆どその凹凸が不明になっており過去数十年間における急激な発展の跡を物語っている。

明治元年(1868年)に今の島津山に品川県庁ができ、北は埼玉県の南部から箱根まで管理していたが県庁は明治4年11月に廃され、東京府の管下に移り、明治11年品川歩行新宿は北品川宿と連合、南品川宿は南品川瀬師町と南品川利田新地と二日五日市の3ヶ村が連合し、各連合戸長役場を設けたが明治以後欧州文明の移入につれ各種工業の勃興の機運に会い新しい工業地として繁栄した、中でも往古の品川歩行新宿が最も商業地として繁栄したところで今なお店舗を連ね、当時の隆盛を幾分偲び得るとはいうものの、何分にも道路の幅が狭いから、これに並行してその西に全く近代的な京浜国道が活躍を示しているため次第にその繁栄を後者に奪われつつある。品川町人口5万6千人

「御殿山」

最祿年中には太田道灌の居城の旧址なり、三代將軍家光此処に僧沢庵、小堀政一等を会して茶を献ぜしめたり、元祿年中中殿舎灰妒の災に罹りて後、八代將軍吉宗の時代に吉野山より桜樹を移植し、爾來著しき花の名所となった。此所は海に臨む丘山で数千歩の芝生あり春時瀾慢として丈莊觀たり、弥生の花盛には雲ともみえ、雪の乱ともみえ、花の香は遠く浦風に送られて、磯菜を摘む浦人の袂をなせ、酒樽を前にして酔人遊び春の風は枝を鳴さず、鶯の轉りも大平を奏でたが、嘉永6年此の丘の土を以て品川沖に砲台を築き、文久2年には此の地に外国館を設けた。

大井の沿革

50代恒武天皇延暦3年3月(784年)石川麿の孫従三位権中納言豊人が、武蔵守に任ぜられ関東に下向し居館を荏原郡大井郷に設けた。従がって大井郷が当時武蔵国一帯の政令の出たところである。

大井は当時大井郷の地であってその長臣大井某をもって守護職とした。大井家は氏を大井と唱えて代々世襲した。この土地は荏原郡第一の盛り場であったことは「和名抄」に記されており、奈良朝から平安朝に続いて長い間奥州道(今の池上道往昔鎌倉街道)中の宿駅であった。

源頼朝が関東を攻略するに当り大井氏の遠孫兵衛次郎実春は、その頼朝の軍に従がい功を以て大井郷を管領した。品川も大井の一部であったことは古文書にも大井村字権現台とある。

大井氏が伊勢国香取へ領地替となり大井を去り代って、梶原源太左兵衛門尉景季の長男景望が管領となり(源実朝時代)、代々世襲しておったが後に小田原北条氏の領有になり梶原家は小祿となり、大井は北条の臣河村修理亮の知行所となった(小田原北条分限帳より)、この時代には品川と大井とは対立的な存在で共に栄えた。

永祿7年鴻ノ台の合戦で河村修理亮が討死後は、長谷川豊前守が管領した。

天正18年徳川家康江戸入城後は代官の支配地となり、今までの街道は廃されて大森から海岸に沿って品川三宿へと変った。これから後は南に大森宿が勃興し、北は品川宿が設けられ大井の繁昌は両宿

に奪われた。

江戸幕府末期には内府の地は人家で填実されたが、この地は微々として振わず明治維新の際は戸数800戸に充ない唯一農村であった。明治元年品川県の管下となり、さらに明治5年東京府に属し名主を廃して戸長を置いた。明治9年6月に戸数1,860戸位であったが、明治12年に至って町村会の制を設け村会議員を選出し、明治41年7月に大井村は大井町となった。院線電車・京浜電車・池上電車の開通や京浜国道の完成と大正3年12月に大井駅が開設され、急速に京浜間の要路にたち多くの地の利を占むるに至り、大正4年7月に鉄道院大井工場が創立（新橋工場が廃される）し、次いで日本光学KK等の会社が設立される等々工業の勃興と共に早くも工場地帯を構成し、大小工場相次いでおこり、大正10年5月1日現在で戸数3,081戸人口13,535人と増加し、関東大震災後は急速に増加して益々振うに至った。

「新編武蔵風土記」に産物、海苔、品川獺師町より、鮫洲浜川大森麴谷村辺までの間の海中に生ず、品川海苔と呼びて賞翫す。浅草海苔と呼ぶは、浅草茶屋町の商人四郎左衛門と云う者の祖、葛西中川沖の海苔を採り浅草にて製せし故なり、其後此辺にて採始めしに美味にして上品なれば今は浅草にて製せず皆品川海辺にて採るものを以てす。冬より春に至る迄に採りて製す、云々。

大 崎 の 沿 革

昔から大崎七崎と言って中央に入海を取りこめて出崎が多く、鎗ヶ崎、袖ヶ崎、千代ヶ崎、上大崎、下大崎、亀子島の七つの岬があった中でも大崎が一番大きなもので、やがて七崎の総名称となり地名となったのであろう。

この出崎の海との間に谷や窪と名のつく大字小字が大小二十余もある、桐ヶ谷、谷山の如きそれでありその当時を思わせる名残の名である。昔雉子宮の坂下から舟で桐ヶ谷宿木神社へ渡したと古伝もある。昔は入海であり目雄境まで白波が押寄せ、外側に丘陵が連且していた。両側の丘陵地帯には大古先住民族が住んでいた、目蒲線不動前駅一帯の地から石器を発掘しており、居木橋南方の畑地から貝殻郡がしばしば発掘された。

大崎地方は菅苺荘とも言われ、高橋院古縁記に荏原郡菅苺庄大崎永峰と記されている。また日野庄にも属したこともあった。大崎町は上古は御田郷の内といわれ大崎の前名は谷山である、谷山の名は大永年中小田原北条氏が四戸城を取った頃より有り、境域も広く旧大崎町を包含していたようである。

谷山村中一番発達したのは江戸に近い猿町から同町附近の今の下大崎あたりで、ここには藩侯の別邸地に袖ヶ崎神社、雉子宮神社その他名のある寺院も多く大崎20ヶ寺中、実に10ヶ寺があり商家等も立ちならび順次他におよんだ。寛文11年4代将軍徳川家綱の時品川宿の一部を割いて大崎村を置いた、年代はつまびらかではないが桐ヶ谷村、居木橋村も同時代に分かれた。元禄10年に上大崎村、下大崎村に分けられて発展したので谷山村は次第に狭められた。

高輪八ツ山から三宿へと街道が変ってから、文化をもたらず街道から離れて自然に置忘れの形とな

った。徳川時代は大崎村，居木橋村，桐ヶ谷村が品川領で，谷山村は麻布領に入り共に幕府直轄領地であった。明治2年品川県の管轄となり，明治4年11月東京府の所轄となり，明治11年連合戸長役場を谷山村に置いた。

明治23年上大崎村，下大崎村，居木橋村，桐ヶ谷村，谷山村，白金猿町が合併して大崎村となったが，工業の勃興するにおよび繁栄に向ったので，明治41年町制を布き大崎町と改めた。

荏 原 の 沿 革

68代後一条天皇長元3年(1030年)に甲斐守源頼信が，平忠常を討つために武蔵国の一角に到り，荏原郡荏原郷において旗を中延の高台に立て，軍馬の勢揃いをして発進した今に旗の台の名が残っている。

90代龜山天皇文永元年(1264年)に八幡太郎義家の遠裔にあたる，左衛門尉義宗は荏原郡を領して領主となる。姓は源氏であるが荏原を氏として中之部に居館し代々この地を祿していた。

荏原郡館が荏原郡の真中で中之部の地名があり，現在も中延と書いて昔しどおり「ナカノブ」と発音している。八幡山法蓮寺は義宗の一子朗慶上人の開祖に係る寺で，館内に建た私仏であり八幡神社もまた荏原家の宗社であった。後に荏原は振わなかったが，屋敷下，源氏前，矢の橋等時の武家の居館に伴う地名が残っている。

小山と下蛇窪の二ヶ所から古墳が発掘され，古代民族の住んでいた遺跡があった。

上古は荏原郷および御田郷に属し，中古は大井郷の一部となり，近古においては中延村，小山村が馬込領に属し，戸越村，上蛇窪村，下蛇窪村は品川領の配下で幕府直轄の地であった。

明治2年5ヶ村は品川県に入り，明治4年に東京府の所管となり，明治23年町村制施行と共に5ヶ村は合併して平塚村と称し，大正15年平塚町となったが，神奈川県平塚町と同名でまぎらわしいため，昭和2年に荏原町と改称した。

「蛇窪の名称」

色々に伝えられているが一説には，「蛇窪は昔ジャクボと音し，即ち低温の地故蛇多かりしに依る云々とあるのは間違い，ジャクボは即ち「壁崩れ」のなまりにて所謂(蛇崩れ)流れなど，土崖を崩す謂なり」とある「日本国勢総覧より」。

旧 品 川 区

芝区の南に接し西は目黒，荏原の両区に，南は大森区に接続する部分は台地であり，東は東京湾でその形は東西に短く，西北及び西南に凹字形を成し，町数73町に区劃されている。

昭和7年10月1日東京市の市域拡張により，旧荏原郡品川，大崎，大井の三町を合併して区の区域と定め，大東京市に編入された。往昔は江戸の南入口であった，明治5年(1872年)に東京と横浜間の汽車が開通し，明治18年(1885年)品川，新宿，赤羽の間に山の手鉄道が開通し，省線京浜線及び

山の手線の分岐点に当り、前者に大井駅、後者に大崎、五反田、目黒の各駅があり、大井駅は私鉄の大井線に五反田駅は池上電車で、目黒駅は目蒲電車で連絡する。私鉄京浜急行電車は品川を起点とし、省線東海道本線と平行し鮫洲、浜川の各停留所がある。

大正14年目黒川の改修工事の一部として、目黒河口の土砂をもって、品川海岸の埋立工事が施行され現在の東品川で、次いで天王洲町、勝島町と年々埋立工事が進められる。

昭和8年戸数40,030戸、人口190,920人面積10.162平方軒で東京府が施行した海岸埋立地（東品川）30万坪には、大小の工場が林立し京浜工業地帯の一部をなし、大崎、大井も工場地帯と住宅地とに分けられて、躍進の余地が残されている。

旧 荏 原 区

大東京市の西南に位し東北及び南の一部は品川区に接し、西北に目黒区西南は大森区に境し、全区5町に区割されている。昭和7年新市域編入の時は滝野川区と共に荏原町一町を以て一区をなし、新しい区の膨大な面積に比較して極めて狭少であった。

昭和8年に戸数39,050、人口167,520人、面積5.087平方軒で大正9年に僅かに8,500人であったのが、昭和5年には132,100余人と実に13倍強という正に幾何級数的激増で、新編入82町村の内人口の増加率は最高を示した。これは大正12年に目蒲電鉄が開通したのと、一つには平坦な土地であったので市内との交通が便利であり、且つ大震災によって市内の住宅が欠乏しその後も住宅が不足していた。また大正6年以来実施された耕地整理と近郊町村における都市計画道路の新設による、小商人の逃避も移住者増加の一因をなし、中延町、戸越町は商店街と住宅地に、小山、上神明、下神明（蛇窪の改称）の三町は商店街として発展し、中でも小山の町は小山銀座、小山本通りの名で武蔵小山駅のそばで繁栄が目ざましく、新興市街の面目躍如たるものであった。

ところで府下随一のレコードを作って素晴らしい発達に比例して、非常な勢おいで殖えたのが児童数で全く息のつく間もない位に校舎の新築、増築と莫大な町費の大半をこれに注がねばならない結果は、町の財政を極度に赤字に追い込み赤字のふえる荏原町として悲しい誇りであった。

この由々しき赤字を解消するためにも、大東京の実現を町民は渴望していた。従がって町の公共施設は遺憾ながら殆んど見るべき何もない状態で、住宅区域として発達を遂げた荏原町は曲りくねった狹隘な道路と、無統制に立てられた住宅が並び、日日、丸之内方面その他に通勤する人々が「池上電車」「目蒲電車」「目黒バス」等によって、省線五反田駅および大井駅に雪崩をうって出るのが普通で人口の約6分の1であり、これらの駅は一日に数万の乗客を吞吐していた。

池上電気鉄道には戸越銀座駅、荏原中延駅、旗ヶ岡駅あり、目蒲電鉄には武蔵小山駅、西小山駅、同大井線には東洗足駅、荏原町駅、中延駅、蛇窪駅等の各駅があり、自動車の便もあり交通は至便であった。

近代品川区の沿革

明治22年に東京市が誕生し政治的、経済的、文化的中枢をなす帝都として、東京市およびその近郊の町村は有機的な連がりをもっていた。特に大正12年の関東大震災後は郊外電車の発達と相まって、都心地より郊外地に移り住む人が急激に増加し、田畑は住宅地となり、荒地は切り開かれた。殊に品川町、大崎町、大井町は東京・横浜間の要路に位し、工業の勃興によって京浜沿線埋立地および目黒川、立会川沿いに、工場地帯が形成され大小の工場が相次いで起り、いわゆる京浜工業地帯の一翼としての役割を担ったのである。

かくして東京市の周辺地帯は都心よりの移住や、全国より集中する人口の増加ならびに産業の勃興による、有機的の体制により市域の拡張が図られ、大東京建設の計図が進められ昭和7年(1932年)10月1日東京市は隣接五郡の82町村を市域に併合し、旧15区の外に新たに20区を加えて35区とした。これにより荏原郡品川町、大崎町、大井町の地域をもって品川区とし、荏原郡荏原町の地域をもって荏原区とした。満州事変・日支事変は京浜工業地帯に工業を急速に拡大させ、東品川埋立地等の空地は一変して工場を林立させるなど産業経済、文化の発達を促がし、人口も年々増加の一途をたどり昭和15年(1940年)10月1日の国勢調査には人口419,403人となった。翌16年(1941年)12月8日、日本は大太平洋戦争に突入し、昭和18年10月1日に府と市の二重行政の解消と国内戦時体制の整備の必要から、東京府と東京市が併合して東京都制が施行されたが、品川区、荏原区は従来どおりの地域であった。

しかしながらサイパン島の陥落により米軍大型機の空襲により、昭和19年11月から20年8月15日の終戦までに被った戦争被害は、東京都を焼野原と化し人的、物的には関東大震災をはるかにしのぎ品川区もその大半が戦火を受けて、戦災家屋51,435戸、罹災者200,650人に達して灰燼に帰してしまったのである。戦後戦災による東京は食糧難住宅難が続き戦後最初の昭和20年11月1日の人口調査には、品川区と荏原区を併せても人口143,490人と減少し復興の目どもなく一時は全く絶望の深淵に投げられたのである。

昭和22年(1947年)4月新憲法の基に地方自治法が公布され、東京都特別区制の施行により区部は人口の減少に応じて同年35区から22区(後に現在の23区となる)に統合整理され、品川区と荏原区は併合されて新しい品川区が発足したのである。

発足当初の特別区は地方自治法に基づいて原則的には市と同様の権能が与えられ、区長選出は公選制で区議会議員数は44人であった。

かかる時転入、復員、引揚等により人口も漸次増加し、区民はこの灰燼の中から新しい品川区建設を旨として立ち上ったのである。かくして希有の災害から立ち直り、朝鮮事変を契機として戦前をしのぐ京浜工業地区に復活し、品川区は著じるしい復興をなしとげた。戦災復興と首都建設は品川区を海に向かって発展させ、昭和24年12月に勝島町埋立地に大井競馬場が開設され同年東京港修築工事計画

の一環として、26年2月に天王洲地先に838,310平方メートルの品川埠頭建設の埋立が終った。この埠頭が完成すると岸壁は500メートルで一万噸級の船舶3隻位が接岸できる。又、同地に品川火力発電所が建設され36年12月に竣工した。

発電力は375千KWで京浜工業地帯の電力の供給を豊かにした。次いで勝島町の先に2,380,000平方メートルの大井埠頭建設埋立工事が進められている。この埠頭完成の暁には2,3万噸級の船舶の接岸が可能となる。昭和35年(1960年)10月1日の国勢調査の人口は実に427,780人と激増し、住宅地域及び各駅前には商店街がめざましい勢いで発展した。特に五反田駅周辺、大井町駅周辺、武蔵小山駅周辺は大消費地帯として大繁華街が造成された。

昭和27年9月の地方自治法の改正は、特別区を都の内部的構成団体とし制限自治区に規制された。区長の選出は公選制が改正されて、特別区の議会が都知事の同意を得て選任する間接選出となった。区議会議員数も人口増により現在は48人である。このように都市化の進行により社会、産業、文化の集中と人口の増加は、必然的に行政需用を激増し区民の文化、福祉、厚生 of 公共施設が要求された。区立小学校37校、区立中学校16校となり、各地域に児童会館、児童図書館、敬老会館、保育園、福祉センター、区営質屋、児童遊園地等が新增設された。又、区民のリクリエーションの場として28年10月に天王洲に野球場を開設した、後日東品川公園に庭球場、弓道場も新設された。34年12月に鮫洲の入江19,867平方メートルが埋立られて鮫洲運動公園が完成した。同年戸越公園の隣りに体育館が新設された。31年12月に大井町駅前に新設された品川公会堂、品川文化会館は、区民の利用が多く需用に応じて地下1階地上5階の文化会館を増築、38年6月に落成した。36年7月に日光市細尾に「日光林間学園」が新設されたが38年7月に林間学園の増築も完成した。同じく7月に区役所の前に地下1階地上4階建の品川図書館が落成開館した。

さらに38年12月に品川区と港区の境にある東八ツ山の入江13,300平方メートルの埋立工事が開始され、3ヶ年計画で施行する。埋立完成の暁は品川、港南区共同で緑地や広場として活用する。

ことに品川は往古より東海道の交通の要衝であって、現代は第1京浜国道、第2京浜国道、中原街道と重要な道路が区内を貫通している。

第1京浜国道入口の八ツ山橋陸橋は交通の難所であったが、38年7月に新八ツ山橋陸橋が突貫で立体交差工事が完成すると共に国道の車道幅が広げられたので、車両の運行は車両本来の機動性と流動性が発揮されだした。本年開催のオリンピックに備えて東京湾岸ならびに、都心と東京国際空港とを結ぶ首都高速道路第1号線とモノレール線が緊急建設されており、現在高速道路は都心より大井町ヶ森まで完成して開通利用されている。ついで鉄道・電車も東海道本線、京浜東北線、山手線、品鶴線及び私鉄京浜急行線、東急田園都市線(旧大井町線)東急池上線、東急目蒲線等国鉄私鉄が縦横に走っており、現在新東海道線が建設されており、都心よりの地下鉄線の延長と相まって、品川区は東京・横浜間の廊下であると共に関西は勿論諸外国に対して、東京都の海陸両方面の表玄関となりつつあり、日本経済、文化の門戸として発展の一途をたどっている。

